

ひがししも ち
東下地遺跡

所在地 豊橋市石巻本町字東下地、字西下地、字日南坂
(北緯34度47分52秒 東経137度26分16秒)
調査理由 道路改良工事(主) 東三河環状線
調査期間 平成21年5月
調査面積 50㎡
担当者 鈴木正貴・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 範囲確認調査は、主要地方道東三河環状線道路改良事業にかかる事前調査で、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成21年5月、調査面積は50㎡である。

立地と環境 東下地遺跡は神田川右岸の低地に立地する。標高は16.5～18.0mである。北側の河岸段丘上には弥生時代後期～古代の高井遺跡群が展開する。

調査の概要 試掘坑はT.T.1～T.T.25の25地点を設定し、遺構・遺物の有無と堆積状況の確認をおこなった。試掘坑はその内容からA～E群に分けられる。

A 群 T.T.1～6は神田川右岸堤防わきに設定した。表土(約10cm)または造成土下ですぐに直径5～15cmの中礫・大礫を主体とする礫層があらわれた。礫層上面で遺構・遺物は検出されなかった。しかしT.T.3では地表面から約190cmまで重機で掘削したところ、黒褐色粘土層があらわれ、その土層中から摩耗した土師器小片が採集された。このことから当該礫層は土師器よりも新しい時期に堆積したことが明らかとなった。

T.T.9・13では、宅地造成土下で礫層があらわれ、T.T.1～6と同様の堆積が確認できた。T.T.9では造成土内から土師器小片が出土した。

B 群 T.T.7・8・10・11では表土を約10cm除去したところ暗褐色粘質シルト層があり、その上面で遺構が検出された(検1面)。遺構は土坑状のものが中心であるが、そこから中世前期(鎌倉時代)の土師器皿・古代の須恵器が多数出土した。そして暗褐色粘質シルト層を掘り下げると、例えばT.T.8では地表面下50cmで礫層があり、その上面でも遺構や自然地形が検出されることが確認された(検2面)。なおT.T.11ではシルト層中から古代の須恵器甕片、検2面遺構内からは古墳時代の可能性がある土師器片が出土した。

T.T.12では遺構・遺物ともに検出されなかったが堆積状況からこの群に含まれる。

T.T.15では中世前期の山茶碗と土師器皿が掘削土内から出土した。

C 群 T.T.14・16・18・19・22・23・25では、地山礫層が深く潜り込んでおり、例えばT.T.19では地表面下約180cmでようやく礫層上面に達した。礫層より上位の堆積は、上が黒褐色、下が褐色の粘土に小～中礫が混じったものである。T.T.23では下の褐色粘土層上面で竪穴建物跡の可能性のある遺構を検出し、さらにその底部でピット1基を検出した。上の黒褐色粘土層が旧表土に該当するとみられる。これらのT.T.では遺物の出土は少なかったものの、窪地地形が埋没したのちに形成された遺構の展開が考えられる。

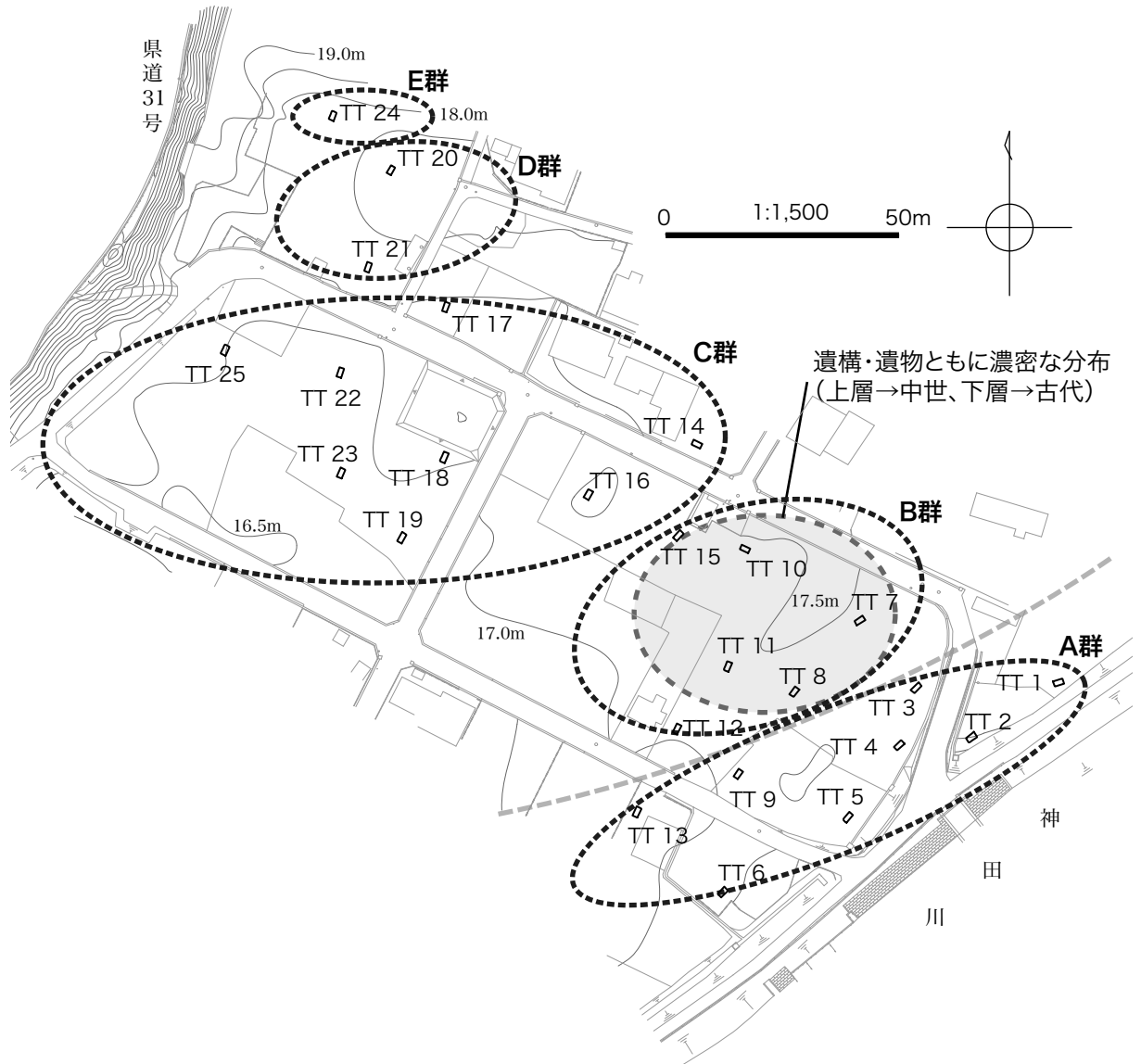
T.T.17では褐色粘土上面で遺構を検出した。同粘土層からは土師器小片が出土した。

D 群 T.T.20・21では遺構検出はできなかったが、礫層の間に粘土層が存在するなど、流路(神田川)の痕跡をうかがわせる堆積状況であった。T.T.20では礫層や粘土層から土師器小片が出土しており、この堆積が古墳時代以降に進行したと考えられる。

E 群 T.T.24は段丘崖に最も近い地点である。地表面下約150cmで礫層に達するが、その上位粘土層で遺構が検出され土師器小片が出土した。また礫層上面でも凹凸が確認され、遺構が検出される可能性がある。

ま と め 東下地遺跡では、全ての調査地点で礫層が確認されるが、その検出深度や成因は一様ではない。特にA群T.T.の礫層は、神田川が現在の流路になりつつあった頃に形成されたものと考えられ、B～E群T.T.との間に、その端が推測される。また、D群では礫層検出深度が深いことから、神田川の旧流路がD・E群T.T.付近にあったことが推測される。ただしそれも埋没が進み、その上層で中世段階の遺構が形成されたようである。

このことから、もともとの微高地でありかつ神田川現流路に影響を受けていないB群T.T.が最も遺構・遺物が濃密に展開する地点として理解される。また、T.T.11・12西方の柿畑は調査できなかったものの神田川と平行に同様な堆積状況が展開していることが推察されることから、遺構・遺物の検出が予想される。
(永井邦仁)



調査区配置図 (1:1,500)